



飲酒運転での交通事故、学生集会などでの一気飲み事件など、いたましい事例を聞くとやるせない気持ちになる。アルコール多飲を持続すると肝硬変まで進展することは事実であり、アルコールの弊害を考えると、その存在を否定する意見を持つ人もいるであろう。私は肝臓担当医の立場上、禁酒・節酒を指導しなければならないが、抗ウイルス剤で制御できた患者には、少しぐらいはOKしてあげたいと考えている。それはアルコールのメリットは計り知れないと感じているからである。特に気分転換には最も効果があり、何か有害な感情を封じ込めることには有意義であろう。

男は難しい生き物であり、いつも「すごいね、いいね」などとちやほやされないと精神的安定が得られないものである。若い時には目標達成が成されていなくてもがんばれるものであるが、いつの日かこんなはずではなかったとの思いが生まれてくるものである。40歳前後が多いと思われるが、誰でも何らかの達成が得られなかったとして精神の不安定感を経験しているはずで、その誰にも説明できない憂鬱な気分を飲酒によって切り抜けたことがあるはずだ。そうやって、多くの男達が飲酒により忘れられる効果の恩恵を毎日受けているのであろう。私も曲がりなりにも元気でこれまで生きていられるのは、ビールのおかげにほかならない。おいしい晩御飯を作ってくれる妻に感謝しながら、今も毎晩のビールは欠かしたことはなく、おかげで最近では精神的に安定している。

一方、芸能人・タレントの覚醒剤事件が絶えない。常に絶頂期というのはあり得ず、何らかの限界に際して、何かに頼りたいのだと思われる。その気持ちは理解できるが、覚醒剤は世界的に許されないことになっている。彼らも合法的なアルコールで済めばよかったのであろうが、対アルコールへの反応性は個人差があり、まったく飲めない人や逆に適度な酩酊状態になれな

い人が存在するのも事実である。常に絶頂期というのはあり得ないことは誰にでも当てはまることで、男の人生・仕事などの浮き沈みで何らかのサポートが必要な人は常に存在するのであろう。アルコールでストレス解消が無理な場合には、どうすればいいか私にも答えは出ない。結局は、人と人が支えあうしかないのだと思われる。家族がその役割を担うと期待されるが、その支えてくれる家族がいない人もいると思われる。インターネットの普及により人と人のつながりがたやすくなっている側面もあり、何らかのサポートが必要な人を孤立させないことが重要であろう。私は参加したことはないが、SNSで「いいね」を見ることで、何らかの満足感が得られているようなので、孤立化防止につながるかもしれない。

アルコールと人間の付き合いは非常に古くから続いていたらしい。むしろ余剰の食料を醸造していくことこそが、文明そのものであったと考えるべきかもしれない。ギリシャ沖の2000年前の難破船からアンフォラという壺に入ったワインやオリーブオイルや魚醤の残骸が発見され、地中海交易があったことが判明しているし、エジプトのピラミッド造りは奴隷ではなく、ビールを報酬として一般民衆が担っていたらしい。アルコールを認めない宗教はあるものの、禁酒法まで制定した国はアメリカ以外にはなかったらしい。その禁酒法も、不純物の混入した劣化した製品が売られ、健康を害する人が多発し、その販売にマフィアが関わり、犯罪と密接につながっていたことから、結局13年で廃案となっている。

今後も、人類はアルコールとの長いつきあいを断つことはないであろう。私も野球観戦日だけは昼間のビールをOKとし、人に迷惑をかけないように、体重を増やさないように注意しつつ、肝臓担当医の不養生とならぬよう肝臓には気を付けて飲酒は続けたいものである。